



①



②

(昭和34年6月27日 富岡畦草撮影)

消えた街角：富岡畦草・記録の目シシリーズ 昭和34年 日本橋界限

三六〇三年、江戸に腰を据えて、国造り町造りを計画した徳川家康は、武蔵野台地、現在の杉並区に源流を持つ平川の流路を変更して、舟運に対応した日本橋川を開き、日本橋を架けた。そして、日本橋を起点に全国へ通ずる五街道と、間道を整備し、街道には宿場を設置し伝馬の制を定めて、流通の便を図った。すべての道はローマに通じるという程、大でないにしても、その構想の適切によって、今日まで日本人は、はかりしれない恩恵を受けてきた。

当然、日本橋を中心に江戸の町は繁栄し、京に代わる政治・経済の中心となっていた。その活況は多くの絵画・記録にとどめられているが、明治以降の西欧の近代化によって大きく変化した。その過程で体験した、九三年の関東大震災は、致命的打撃を与えた。それでも当時の人たちは屈せず一致協力、復興に心血を注ぎ、日本文化と西欧文化の融合を図りながら、後世に輝く新形式の文化遺産の数々を構築していった。今、高速道路が覆いかぶさる日本橋に立つと、先人の誠意と情熱に身の引き締る感動を覚える。

また、激変する環境の中で日本橋に踏みとまり、幾百星霜の長きにわたり暖簾を守った老舗に、伝統の偉大さを見こしその名を列記して心からのエールを送る。(アイウエオ順) 和菓子：栄太郎・はんべんの神茂・刃物の木屋・漆器の黒江屋・果物の千疋屋・寝具の西川・鏝節のにんべん・紙の榎原・三越百貨店・化粧品：柳屋・海苔の山形屋と山本・銘茶の山本山・乾物の八木長。この中に二六二年創業の白木屋も含まれていたが、残念ながら昭和四十二年(一九六七)脱落した。

正直、戦後復興期の日本橋は、銀座に勝る活気を見せていた。特に三越、白木屋、昭和八年(一九三三年)関西から進出した高島屋が程よい距離を保ち豪華なビルを構え、全国からの客を集めた。ところが、昭和四十年代半ばからの地下鉄網の進展と相互乗り入れの実現で客の流れが変わり、日本橋の客は目に見えて減少した。今、その悪条件を乗り越えて、活気を取り戻そうとする日本橋に、老舗の意地を感じる。

(昭和三十四年六月二十七日撮影)

文：富岡畦草(とみおか けいそう)
大正15年8月、三重県生まれ 日本写真協会、日本写真家協会、自然科学写真協会などの会員



(平成17年1月7日撮影)

高速道路のすぐ後ろに見えるのは、昨年10月11日にリニューアルオープンした日本橋三越新館。その後ろにそびえ立っているのが、完成間近の日本橋三井タワー。上層階にはマンダリン・オリエンタル・ホテルの入居が決定し、三井本館には「三井記念館美術館」がオープンする。重要文化財である「三井本館」の保存・活用と同時に地上41階建の最先端の超高層複合ビルは、「保存と開発」を両立させる新たな都心開発のあり方として注目されている。また、今回は日本橋で最も古いデパート「白木屋」(写真②)の貴重な写真も同時掲載するのでご覧いただきたい。(文：渡辺邦博)

